

大乘院門跡隆温の画業

—新出資料《若松鶴図》の調査—



図27 隆温筆 若松鶴図

はじめに 奈良文化財研究所では名勝旧大乘院庭園に関する調査研究の一環として、絵画資料の調査を進めており、『紀要2012』においては奈文研所蔵となった「大乘院四季真景図」を紹介し、その作者が大乘院門跡隆温であることについても触れた。本稿では新たに知られた隆温の作例を紹介することで隆温の画業の一端をあきらかにするとともに、画絹の観察をおこなった成果を報告する。

新出資料の紹介 本図（図27）は青空のもと、若松を背景に二羽の鶴を描く若松鶴図である。若松と鶴はいずれも吉祥の画題。

絹本墨画淡彩。鶴の頭頂と口内に赤色（朱か）を差し、松葉と地面に緑色（緑青か）を刷き、画面上半部全体に淡く青色（群青か）を刷く。

白文方印「有隣之印」一顆と朱文方印「懷徳堂」一顆を捺す（図28）。藤田祥光『大乘院』によれば、隆温は茶人として懷徳堂有隣を号したという。署名はないが、軸裏に柱書墨書「大乘院御門跡隆温御所御染筆／若松鶴画」がある（図29）。

軸装。表装は素朴ながら、一文字と風袋は紫地に金で牡丹紋を描く。牡丹紋は藤原氏嫡流近衛家の流れを汲む諸家で用いられ、大乘院でもこれを用いたことが知られる。

法量は、画面縦101.2cm、横30.3cm。表装縦184.0、横41.0cm、軸長47.3cm、径2.5cm。

素朴な筆致で描かれた明るい画面は、すでに隆温の作例と知られる「大乘院四季真景図」と共通し、前稿でも指摘したように隆温が師事したと考えられる原在照の画風の影響を受けたものみることができるだろう。二顆の印章と外題からも本作が隆温の真筆であることを疑う余地はない。そこに職業画人の技巧を見ることはできないが、門跡隆温の画業を知る上で欠かせない新出資料と言えよう。

現在、京田辺市草内南垣内の個人主宰の文庫に所蔵される。その伝来した経緯は定かではないが、所蔵者の談によれば、所蔵者の祖父の代にはすでに当家の所蔵へ帰っていた模様。当地の昨岡神社に残る18世紀の記録には当家の名が氏子として見えるらしく、当家は遅くとも18世紀までには当地に在住していたことが知られる旧家である。また、『多門院日記』などによると草内の地は中世に興福寺の別会五師方の所領であり、当地が興福寺と

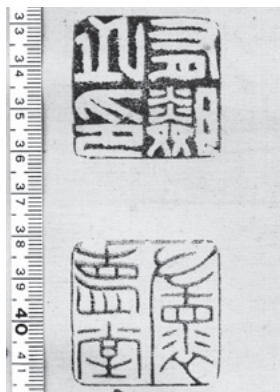


図28 印章

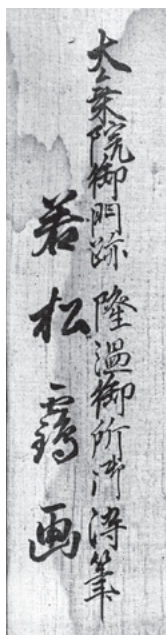


図29 柱書墨書銘

浅からぬ縁を有していたことがうかがえる。幕末における当地あるいは当家と大乘院門跡隆温との関係については今のところ知られることがないため今後検討を続ける必要があるが、上記のような歴史的経緯は本図が当家へ伝来した必然性を担保するものと理解しておきたい。長寿の寿ぎあるいは正月飾りとして大乘院門跡より贈られた品であろうか。

『紀要2012』でも触れたが、大乘院門跡隆温は二条治孝の男。二条斉信の養子となり大乘院に入る。明治元年（1868）に復飾し、翌年松園姓を称し男爵に列せられる。文化8年（1811）生。明治8年（1875）卒。

画絹の観察 近年では絵画作品の研究の一環としてその画絹を観察することにより、時代観などを探ることがおこなわれている（杉本・竹浪2008）。今回は埋蔵文化財センター環境考古学研究室所蔵のデジタルマイクロスコープ（キーエンス社製VHX-600）によって画絹を観察した。図4は観察に供した50倍画像である。

結果、本作の画絹は5mm宛で経26本、緯24越が観察された。比較対象として『紀要2012』で紹介した奈文研蔵隆温筆四季真景図を同様の手法で調査すると、画絹は5mm宛で経24本、緯19越であり、絹を横使いに用いていることが観察された。参考までに両図の175倍拡大画像を図31・32として掲げる。なお、図32は画面の方向に従って撮影しているため、経糸が水平方向に、緯糸が垂直方向に走っている。両者の保存状態の差もあるため一概には言えないが、ほぼ同種の絹を用いている印象を受けた。杉本氏らの研究成果と照らしても、いずれも近世、19世紀の画絹と見て大過ないものと思われた。

まとめ 本稿では大乘院門跡隆温の筆になると考えられ

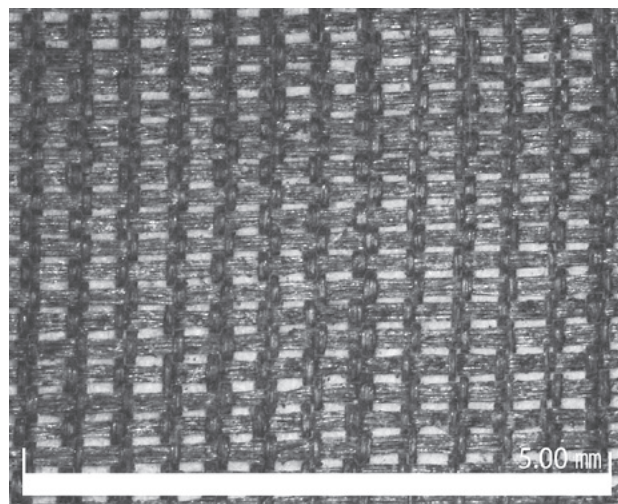


図30 若松鶴図画絹デジタルマイクロスコープ画像（×50）

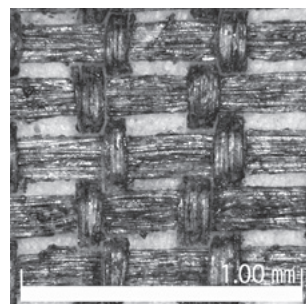


図31 同（×175）

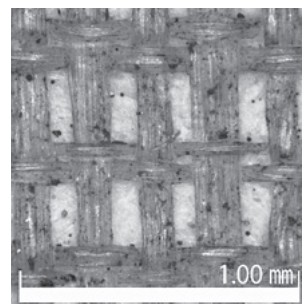


図32 四季真景図画絹（×175）

る新出の絵画作品を紹介することで、その画業の一端をあきらかにしようと試みた。これまでに知られる隆温の作例は大乘院庭園を描くものに限られていたが、本作の出現によって、その他の主題にも取り組んでいたことがあきらかとなった。その画風は四季真景図によっても知られたように技巧を凝らさない素朴な筆致の明るい画面が特徴で、原在照に師事したとする一説を頷かせるものがある。また、画絹を観察すると、奈文研所蔵の大乘院四季真景図と今回紹介した若松鶴図には共通した特徴を見出すことができ、両者ともに近世後期の画絹と認められることをあきらかにした。抜けの良い画絹は隆温の明るい画面を支えるものとしてふさわしい。この観察結果は両作品が隆温の時代、すなわち幕末期に描かれたことを示す一つの証左と言えるだろう。（児島大輔）

謝辞

本図の調査にあたっては洛南艸舎文庫古川章氏、名勝大乘院庭園文化館長植田光政氏のご協力を得たほか、デジタルマイクロスコープ撮影については環境考古学研究室内の協力を得た。末筆ながら御芳名を記し、感謝申し上げます。

参考文献

杉本欣久・竹浪 遠「（調査報告）黒川古文化研究所所蔵の日本・中国絵画の画絹について」『古文化研究』8、黒川古文化研究所、2008。

図版

図27 中村一郎撮影。

図28～32 筆者撮影。